



教えることへの情熱と前向きさを大切に。

学校制度運営

NZ 現職校長から日本の先生たちへメッセージ

Society Change, My own child —刻々と変化する社会の中で、目の前の子どもにとって何が一番良い方法かを判断するのが先生です。あるいは「自分の子どものためだったらどうするか?」という価値観でも良いでしょう。先生こそ働きすぎずに、家庭を大切に、社会と関わりを持ち、そして何より、教えることへの情熱と前向きさを失わないようにしていきましょう。



Cotswold 小学校校長 Stephen Harrison

5年間のクラス担任後、1986年(28歳)から校長職。1989年の「明日の学校」改革を校長として経験、都合5校を経たのち1998年から現職、52歳。自らも子育て両立に奮闘し、既に3人の子どもは成人。

たくさんの宿題は親への挑戦?!

家庭

生活起点学習社会のNZ。生活の場である家庭学習や実社会学習が重視され、学校教育は、そのきっかけづくり(予習)と研鑽の場(復習)のようだ。日本とは真逆で、学校とは家庭学習サポート機関と呼んで良い。それほど宿題が多く、それも親のコミット、親子の会話なくしては終わらないものばかり。だから先生の役割は、子ども同様、親へのバックアップが大切となる。



クラスメートが順番に持ち回るマイク型の宿題当番の「印」。社会には I am a news reporter、理科には Class Scientist と書かれている。

Reading は毎日一冊以上。色分けされる読書力。

親子会話の心得例



先住民のマオリ語は Year1 から学習開始



学芸会は2日間、昼の日と夜の夜。共働き両親向けの配慮?!

授業先生

100年以上続いた教委制度は撤廃。教科書も、指導要領もない。

自己学習社会のNZ。小学校で学ぶことは「学び方」である— Cotswold 校長談。NZでは Self-Learning Management を重視しているので教科書も指導要領もない。教委廃止後の国の役割は最小限(予算配分や教育監査等)、運用・方法論は殆ど現場に任せられている。決まっているのは、生徒一人あたりの配置教員数、学年毎の学習到達目標点と指定ノート類くらい(写真上)。方法論は現場に任せられる。口や手を出し過ぎないで大人が見守ることが大切です—クラス担任談。



指定ノート(Year2)



自己学習の管理ではスイッチOn-offを学ぶ。

2010年度のナショナルスタンダード。Year1~8までの到達目標が記載。

学校が自己資金を稼ぐ! 親のもう一つの役割。

家庭

ファンドレイジング社会のNZ。公立学校は年間運営費の1~2割を自前で稼ぐ、補助教員採用やパソコン、図書購入などに充てている。単にお金の寄付(Donation)を集めるだけではなく、サービスや消費の収益を上げる事業をする。詳細は割愛するが、チョコレート販売、ピザランチ、ソーセージシズラー、クラス集合写真、ディスコ大会、なわとび大会、春休みの宿題、子どもの作品オークション等に驚かされる。その中心活動は有志のPTA/PA*に委ねられ、まさに事業型NPOのようだ。保護者力や地域力が学校を支えることになり、教育の質は地域ぐるみで確保するのがNZ流である。



大好物のソーセージシズラー



クラス作品もオークション



なわとび大会も資金調達



プロのDJを招くDISCO大会

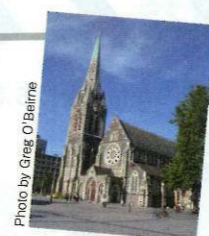
*PA: Parent Association



及川 孝信 Tony Oikawa
2009年4月からクライストチャーチ在住。息子(当時5歳)の現地小学校入学から一年以上にわたり、学校現場や子育て世代の働き方・暮らし方を研究。20代後半で起業、30代に地方産業活性、40代で社会人大学院生として公共経営や教育政策を学び直した自身の経験を活かしながら、次世代教育や父親支援の観点から活動中。Kiwi-J-Ana 代表、43歳。

ケーススタディ

今回の内容は、私の息子が入学した学校現場を中心とした事例である。コッツウォルド小学校は、人口約38万人のクライストチャーチ市内の北西部にある中規模校。現在470名、20クラス(6学年)で、留学生8人を含む38ヶ国の多様な生徒が在籍中。教職員数37人、うち約27人相当が配置教員数。



街の中心にある大聖堂



全面芝生の校庭

職員室はない、時間割も柔軟。

授業先生

協働社会のNZ。だから先生は孤立しない。職員室はないが、先生専用ラウンジで寛げる。自席は各クラスにあり(写真下)、担任は持ち上らない。先生どうしや、先生と親はよく「立ち話」をする。明日の授業内容、来週の遠足、宿題の方法なんて重要なことも詳細がそこで決まったりする。現場権限だから出来る。もちろん定期的な職員会議や三者面談もあるが短い。いつでもどこでもTalk togetherが大切— Cotswold 校長談。

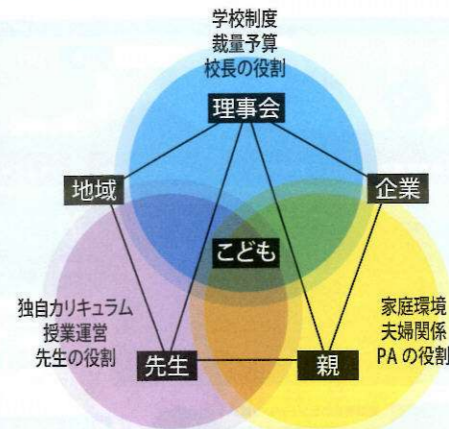


先生毎で管理する教材
クラス内の担任席

学校制度運営

6~16歳が義務教育(11年間)

義務教育無償社会のNZ。6+2+3(+2)学年、4学期×10週間が基本形。小中、中高一貫校等の多様な形態がある。全国2,581校のうち約96%が公立学校。一部学区制あり。実際は5歳の誕生日の翌日から小学校(Year0/1)に入学できる。16歳を過ぎて働くか、進学を目指すかは本人次第。学歴ではなく資格社会の中で必要な学習を自らを選択する。ちなみに大学入試(一斉テスト)はない。



百校百通りの公立学校
ニュージーランドの学校制度は1989年の教育法改正により劇的に変化しました。中央集権から現場中心への方針転換は「明日の学校」(Tomorrow's School)改革と呼ばれています。それから20年を経た公立学校の姿は、上図のように、子どもが基本形です。まさに「明日の学校」の理想像なのかもしれません。その多様な幾通りもある形態は、公立のようもあり、私立のようでもあります。本レポートでは「学校制度・運営」、「授業・先生」、「家庭」の各観点別に区分して要点を解説します。

レポート...及川孝信



Christchurch in New Zealand



全校集会は表彰大会



先生も授業に参加中

授業先生

褒め上手な先生たち。

表彰社会のNZ。全校集会では些細なことでも何十人も表彰される(写真左)。授業でも先生は子どもを褒める、さらには親も褒める。親はその幾通りもの褒め方を家で実践することになる。先生の役割は、授業の司会進行、勇気づけ、対面テスト、作品展示、親との立ち話(情報共有)であり、あくまで主役は子どもたちである。教師というより応援リーダーみたいな感じ。

Case-Study of primary school in NZ

Briefing a Japanese article in the teacher's magazine, written by Tony Oikawa, August 2010



©Wutan #13, July 2010

Short descriptions and *some comparisons with circumstance in Japan*

- ① NZ school system has been widely switched from centralization to school-based in past two decades since 'Tomorrow's School' in 1989. Nowadays there is existing hundreds of school characteristic even within state school moreover all pupils are basically placed in the middle of surrounding by BoT, teachers, parents, communities and corporate social responsibilities.
⇔ It has been NOT reformed but still kept by centralization despite Japanese society, culture, lifestyle and economy had been dramatically turned in same decades.
- ② Introduction of Cotswold Primary school in Christchurch
- ③ Flexible class timetable/curriculum in school. No fixed teachers' room (teacher's desk in class room)
⇔ There is fixed timetable and/or curriculum controlled by board of Education and generally fixed teachers' room separated from class room in Japan.
- ④ Compulsory education from 6 to 16 years old. Each child can enter primary school from five years birthday.
⇔ From 7 to 15 years old. All start primary school at one time, 1st of April in Japan.
- ⑤ Encouraging, praising, awarding by teachers, parents and any adults.
⇔ A number of Japanese included teachers and parents is traditional-culturally NOT good at praising even for own children but they do encourage and force to study more hard to enter university.
- ⑥ Message to Japanese teachers by Mr. Harrison: "To keep your passion for teaching is one of the most important thing and please think the best way for any pupils as well as done for own child."
- ⑦ The importance of collaboration between teachers and parents for children self-managed learning.
⇔ a number of Japanese parents excessively depend both on school teachers and private after school instructors. This means their learning is not based on their life but focused into examination technique.
- ⑧ National standard indicates pupils' achievement/goal in detail at each school years
⇔ Japanese government provides authorized textbooks to all pupils and cumulative guidance to all teachers with full amount of knowledge while school teachers rarely have a freedom of curriculum.
- ⑨ School fundraising is another roll of parent community.
⇔ We do NOT have these system formally but should be appeared in near future in Japan.
- ⑩ Profile of Tony Oikawa, writer this article